

## 慢性疾患児の入院中教育の現状と改善策 (分担研究：慢性疾患児の効果的な支援方策に関する研究)

長谷川行洋\* 安蔵 慎\*\*  
安蔵 慎

教育は慢性疾患児の入院中のQOLの重要な課題のひとつであるが、現状に問題点が少なくないことは関係者が共通に認識している事実と思われる。今年度我々は慢性疾患児の入院中教育に関与する教育・医療従事者および患児の親(母親)を対象とし、アンケート調査を行った。その結果、入院中の慢性疾患児に教育が必要であること、現状の教育には改善可能な問題点があることが判明した。問題点は、(1)病棟内教室の欠如、(2)教員不足、(3)個別化した教育の必要性、(4)厚生省と文部省の連携不足、(5)養護学校に対する社会的偏見であり、各々の改善案を含めて考察した。

### 1. はじめに

慢性疾患児および家族のQOL向上のためどのような施設、人員が必要かについて、松尾班では検討を加える予定にしている。今年度は最優先すべき課題のひとつとして教育について取り上げた。教育は慢性疾患児の入院中のQOLの重要な課題のひとつであるが、現状に問題点が少なくないことは関係者が共通に認識している事実と思われる。今年度我々は慢性疾患児の入院中の教育に関与する教育・医療従事者および患児の親(母親)を対象とし、アンケート調査を行い、現状の具体的問題点およびその改善方法について考察した。

### 2. 対象(表1)

慢性疾患児の入院中の教育に関与する1)教育関係者、2)医師、3)看護婦、4)慢性疾患児をもつ母親を対象とした。1)教育関係者としては、久留米養護学校(本校)教員34名、同分教室(分校)教員17名である。本校は都立清瀬小児病院と連携関係にあり本校校医は都立清瀬小児病院非常勤医師が併任している。分校は都立清瀬小児病院敷地内に併立され、同病院入院中の慢性疾患児が登校あるいは床上の形で教育をうけている。2)医師については都立清瀬小児病院小児内科医師で慢性疾患児の受け持ち医師を最近1年以内に経験した17名である。3)看護婦については慢性疾患児の入院病

\* 都立清瀬小児病院 内分泌代謝科

\*\* "

久留米養護学校校医(併任)

棟・久留米養護学校に勤務する15名である。

4) 慢性疾患児をもつ両親としては、都立清瀬小児病院内分泌代謝科通院中の糖尿病児の母親51名である。いずれも同病院併設の分校(上述)に通学経験あるいは同病院入院経験をもつ。

久留米養護学校は全寮制の病弱児のための小中学校施設(全敷地4526㎡、校舎2264㎡)であり、現在25名が入舎している。その分校にあたる都立清瀬小児病院の併設の学校は病院の敷地(48552㎡)にあり、873㎡の広さをもち、10の教室、理科室、音楽室、家庭科室、講堂、体育館、特別室が児童の使用する施設内スペースである。なお、医師が病状のため分校に登校することができないと判断した場合には床上で1日1~2時間位ずつの教育が行われている(病棟内には教室にあたるスペースはない)。又、通常入院し教育をうける慢性疾患児の内容については、悪性腫瘍、喘息、不登校、糖尿病、代謝性疾患、慢性呼吸不全、結核・慢性炎症性腸疾患、先天性心疾患術後、慢性腎不全、ネフローゼ症候群、ペルテス病などの整形外科的疾患と多様性を認め一定の傾向はない。常時25~30名の生徒がおり、H7年度には延べ93名の生徒数であった。

### 3. 方法

表2に記載した質問を行った。アンケートは1)入院中のQOLの向上のため必要な因子、2)入院中の教育に対する一般的質問、3)入院中の教育に対する自由意見(改善案)の3つから構成された。

アンケートは表1(1)、2)、3)に対しては用紙を直接手渡しし、返事を1週間以内に

都立清瀬小児病院院内の研究者の1人の個人用郵便boxに入れてもらう形とした。4)糖尿病疾患児の母親については、平成8年1月の糖尿病患者の外来採血の際に母親に手渡し、同日に外来で回収する方法をとった。

#### (結果)

##### 1) アンケート回収率について

アンケートの回収率は、表1の4)母親が最も低い回収率であった。低い回収率は恐らく回収がアンケート依頼日と同一であったという時間的制約と、受付、会計などもあわせて行う外来受診日に依頼したというアンケート依頼日の設定上の問題と思われた。

##### 2) アンケート回答について

- (1) 入院中のQOL向上に重要な因子の中では家族に次ぎ教育は高い頻度で重要な因子と考えられていることが判明した(表3:65%)。
- (2) 入院中の教育に関する一般的質問では表4に示すように対象1)~4)いずれも高い頻度でその必要性、受ける権利を認めていた。又、63%の頻度で現在の教育に問題点が存在すると回答した。
- (3) 現在の慢性疾患児の入院中の教育の問題点については表5に集約されたとおりであった。

#### (考察)

今回のアンケートは慢性疾患児の入院中の教育に関与しうる対象を用いて行われた点が意義深い。久留米養護学校(本校)と連携関係を持ち、院内にもその分校の形で院内併設学校、訪問(床上)学習制度を持ち、多くの入院慢性疾患児をかかえている都立清瀬小児病院のような施設でのみ可能な研究と思われる。

アンケート結果からは慢性疾患児の入院中のQOLに教育が重要な要素であるものの、現状が必ずしも満足すべき状態ではないことが改めて確認された。表5に具体的意見の中で数が多かった順に列挙したが、以下各々に考察を加える。

現在の都立清瀬小児病院内の分校内教室に対する意見は、数は多かったものの、こうした意見は恐らく普通校・久留米養護学校（本校）との比較から出ている印象と思われる。印象は正しいかもしれないが分校が約20年前からの施設であることを考えるとやむをえない面があることは否定できない。

病棟内に教室がない点は恐らく多くの小児科病棟のもつ問題と考えられる。慢性疾患児が多く入院すると思われる、例えば40～50床以上の小児科病棟をもつ施設では今後、教室にあたる部屋を少なくともひとつはもつように勧める方針が望ましい。なお、学年の違い、授業内容の多様性を考えると、ひとつしかない部屋がない場合にも部屋がいくつか分割使用可能なスペースと構造をもつことが望ましい。

人員の問題の重要性は論をまたない。実際、都立清瀬小児病院内分校の床上での学習は本人の状態が良好なときですら、人員不足のため、一日1～2時間しか行われていないのが現状である。改善策で述べたような病院訪問教育センターのような組織を作りシステムとして普通校教員を派遣したり、教師免許をもちながら職のない先生を人員として用いることは現実的に可能な方法と思われる。特に普通校教員を用いる場合には金銭的出費を最少限とすることが可能であるのみならず、普通校教員を通して入院中の慢性疾患児の教育の必要性を社会に衆知する

ことが可能と考える。

個別化に対する意見は現在まで多く提案されているものではないだけに重要である。一般教育の場でも日本の教育が欧米と比べ、画一化されすぎ個性が無視される弊害を持つことがいわれはじめて久しい。特に、慢性疾患児の場合には、入院日数（それに関連してくる学力、社会性）・症状などは個々全く異なる点をより考慮した教育がなされなくてはならない。

厚生省（病院）と文部省（学校）とのコミュニケーション不足は、今後の制度改革・提言には深刻な問題となりうる。両者の協力なしには入院中の慢性疾患児の教育問題の前進はありえず、表5の改善案を含めた策が早急に望まれる。

偏見に対する意見も少数意見ながら重要である。偏見のない正しい慢性疾患児の教育の必要性の認識のため厚生省（病院）、文部省（学校）の双方からの啓蒙活動が必要であろう。

（総め）

（1）入院中の慢性疾患児に教育が必要であること、（2）現状の教育には具体的に改善可能な問題点があること、以上2点をアンケート調査の結果をふまえて報告した。

表1 アンケート対象者および回収率

		人数	アンケート回答者
1) 教育関係者:	久留米養護学校教員	34名	26名
	分校教員	17名	17名
2) 医師:	都立清瀬小児病院		
	小児内科医師	17名	17名
3) 看護婦:	都立清瀬小児病院・久留米養護学校		
		15名	13名
4) 母親:	都立清瀬小児病院 内分泌代謝科に糖尿病のため通院中の児の母親		
		51名	33名

表2 アンケート質問

(1) 慢性疾患児の入院中のQOLに関する質問:

1) 子供の入院中の生活の質を向上させるために重要と思われるものは何ですか。

以下重要と思われるものに○をつけて下さい。

1. 家族と過ごす時間・場所
2. 遊びの時間・場所
3. プライベートが守れる場所
4. 教育をうける機会
5. その他あれば書いて下さい。( )

(2) 慢性疾患児の入院中の教育に関する一般的質問:

2) 以下、入院中の教育についてお聞きします。

①子供は入院中に教育をうける必要がありますか。

ある、 ない、 わからない

②子供は入院中に教育をうける権利がありますか。

ある、 ない、 わからない

③現在、入院中に十分に教育が行われていると思いますか。

思う、 思わない、 わからない

(3) 慢性疾患児の入院中の教育の問題点・改善策:

3) 現在の入院中の教育において改善すべき点(現状)をひとつ記して下さい。

また、何をどのように改善すべきかを記して下さい。

現状:

どう改善すべきか:

表3 アンケート結果：入(1)：入院中のQOL向上に重要な因子

	1) 教育関係者 (n=43)	2) 医師 (n=17)	3) 看護婦 (n=13)	4) 母親 (n=33)	5) 計 (n=106)
家族	60%	100%	77%	58%	68%
遊び	35%	71%	54%	15%	37%
プライバシー	30%	88%	39%	36%	43%
教育	63%	94%	46%	42%	65%
その他	心理カウンセリング		保母2名	図書館2名	

表4 アンケート結果(2)：教育に関する一般的質問

	1) 教育関係者 (n=43)	2) 医師 (n=17)	3) 看護婦 (n=13)	4) 母親 (n=33)	5) 計 (n=106)
教育の必要性あり*	88%	100%	85%	100%	93%
教育の権利あり*	93%	82%	92%	100%	93%
教育の現状* (望ましくない とする頻度)	70%	100%	77%	30%	63%

\*「わからない」という回答は含まず

表5 アンケート結果(3) : 問題点および改善策

1. 教室に対する意見 ( (1) n = 14、(2) n = 13 )
  - (1) 教室の老朽化および必要品の不備 (都立清瀬小児病院内分校に対して)
    - (狭い、きたない、テレビ・コンピューター  
・楽器 e t c . の道具の不足) → 金銭的解決?
  - (2) 病棟内教室の欠如 → 金銭的解決  
必要性の衆知
2. 人員に対する意見 ( n = 12 )
  - (1) 病棟床上、訪問教育を十分するための人員不足 → 床上教室が可能なシステムを作る  
(普通校教員の派遣・病院訪問教育センターの設置)
3. 個別化に対する意見 ( n = 8 )
  - (1) 病状・学力の大きく異なる個人の集団内での教育 → 個別に教育の機会を与える  
(このために更に人員が必要)
4. 厚生省・文部省の連携に関する意見 ( n = 4 )
  - (1) 厚生省 (病院) と文部省 (学校) とのコミュニケーション不足 → 両者をまきこんだ委員会、センターの設立
5. 偏見に対する意見 ( n = 2 )
  - (1) 社会的認識の欠如からくる偏見  
(養護学校という名前への偏見) → 病弱時のための施設であるという啓蒙  
(養護という言葉の変更)



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



教育は慢性疾患児の入院中のQOLの重要な課題のひとつであるが、現状に問題点が少なくないことは関係者が共通に認識している事実と思われる。今年度我々は慢性疾患児の入院中教育に関与する教育・医療従事者および患児の親(母親)を対象とし、アンケート調査を行った。その結果、入院中の慢性疾患児に教育が必要であること、現状の教育には改善可能な問題点があることが判明した。問題点は、(1)病棟内教室の欠如、(2)教員不足、(3)個別化した教育の必要性、(4)厚生省と文部省の連携不足、(5)養護学校に対する社会的偏見であり、各々の改善案を含めて考察した。